

はE II-12住居址を切っている。E II-11住居址の床面出土土器（第103図702）はII群A類の浅鉢形土器で、E II-12住居址の炉埋設土器（第105図732）はI群C類である。

他にも重複関係はあるが、一方あるいは両方が粗製土器であったり、破損のために体部文様の詳細が不明であるために詳しくは分からぬ。

I群～III群のうち、鎖状隆起線とボタン状突起を識別形質にするIII群は後期初頭に位置づけられるであろう。II群A類のうち、中空突起をもつ30・33はI群A類にみられる体部文様をもつ。器形や口縁部文様構成は全く異なるが、体部文様にはI群A類との強い関係がうかがえる。しかし、両者の関係が新旧関係としてあるのか、系統の異なるものとしてあるのかは明らかではない。先にも述べたように1は25を切っている。もちろん、炉埋設土器は、住居址を構築する集団に固有の土器が使用されると仮定したことである。25は器形や文様構成からは30・33に近い仲間の可能性がある。II群B類27は1例だけで、全体に占める位置は不明である。I群B類は体部中部に波状沈線がめぐり、文様が体部上半に展開するが、丹羽（1981）はそのような特徴の土器を大木10式土器の第II段階に位置づけている。しかし、I群A類やC類との前後関係や系統的な関係は明らかでない。I群C類に含めた23は口縁部内面に隆起線がめぐる。文様単位を横方向の磨消帯でつなぐ文様意匠は25との関連がうかがえる。本遺跡の場合、口縁部内面に隆起線をもつもので竹管文を伴う例がある。23は、器形的には26などへつながる可能性があり、内面の隆起線は外面へ転化してゆくものかもしれない。

本遺跡の大木10式に併行する土器群I群・II群は文様や器形を識別形質にしてさらにいくつに細分できる。しかし、例えば14や17と33の関係では、器形や口縁部文様構成が全く異なるにもかかわらず体部文様には類縁性が認められる。土器分類には、形態的形質を識別形質にすると同時に系統的にみることができる形質の検討が必要であろう。その意味では、丹羽（1981）が指摘しているように、層位的にまとまりをもった資料の操作によって時間的な前後関係が決められなければならないであろう。第246図に掲載した土器群に時間的な序列を与えることは今後の作業である。

2. 「剝片貯蔵」（第240—245図、図版86—88）

住居址の柱穴や壁寄りのピット・床面上に剝片が集合した状態で出土する例が数多くあつた。出土位置の共通性と選別された剝片の集合状態は、廃棄にかかるものではなく、貯蔵形態をあらわすものと考え、「剝片貯蔵」の仮説をたてた（高橋ら、1978。なおpriorityは高橋文夫にある）。大木10式に併行する時期の14棟の住居址に確認され、1住居址に2～3ヵ所がある場合もあり、合計では20例になる（第2表）。剝片数は最小4片から最大72片である。

出土資料の接合は全部に試み、5例を図示した（第240—245図）。第240図はD II—3住居址出土の接合例である。3種類の石質のもの15片が集合し、13片を占める硬質凝灰泥岩12片が接合した。粒径7.6cm土の亜円礫を素材にし、すべて自然面を打面としている。打面は、例えば1・2と6・8では180°、6・8と7では90°転位されている。10は側縁に微細剝離痕が認められる。第241図はD III—7住居址の珪質泥岩23片のうち接合した3ブロック19片の例である。全休の形状は復元できないが、粒径7.2cm土の亜円礫が素材となる。この例では打面は自然面を除去して作出している。第242図2633は、E II—4住居址No.1出土の珪質極細粒凝灰岩9片が7片接合と2片接合の2ブロックになる。粒径8cm土×4.2cm土程度の亜円礫が素材で、打面は自然面を使い、すべて1方向からの剥片剥取をおこなっている。第242図2634は、E II—4住居址No.3出土の硬質泥岩21片のうち16片が3ブロックに分かれて接合したもの一部である。この部分での打撃方向は一定である。6～8は自然面が除去されている。3・4の側縁には微細剝離痕が認められる。5片が接合した他の小ブロックは打面の転位がランダムにおこなわれている。これは母岩があらかじめいくつかに分割されていることによるのかも知れない。第243—245図はE III—8住居址の接合例である。硬質泥岩72片のうち56片が4ブロックに分かれて接合した。2635dは2635eと2635gが接合した状態の図である。2635eでは大部分が自然面を打面とし、ほぼ同一方向から剥取されている。それに接合する2635g（2635hを含む）は2635eとは反対側の自然面・風化面を打両とする1群とともにそれと90°の打面をもつ1群とで構成される。2635a・2635b・2635iは2635dに接合できなかったブロックである。

以上の接合例にみられる傾向は、いずれも主に自然面を打面として同一方向から剥取できるだけの剥片を得たあとに打面を転位していることである。石核や打面の調整はおこなわれていない。したがって、得られた剥片は規格化された大きさや形状をもたないランダムなものになる。

集合状態にある剥片の構成は、单一石核からのものが全部を占める場合と石質が異なる複数の石核から剥取されたものが混じっている場合とがある。前者にはE III—8住居址の例などがある。後者の例のひとつにE II—2住居址No.1がある。7種類の石質の剥片が集合しているが、62片のなかには黒耀石1片・玻離質流紋岩1片・玉髓4片などが含まれ、もっとも数の多い珪質泥岩でも27片である。

剥片は大部分が剥取されたままのものである。しかし、使用痕をもつ剥片や2次加工された製品を含む場合がある。D III—7住居址No.2の11片中には石鎌1点が含まれ、E II—8住居址では43片のなかに削器2点・鋸歯縁石器1点・削器状石器2点・使用痕のある剥片9点が入っている（使用痕としたものは肉眼で観察できる微細剝離痕を指す）。

完全な石核に復元できる例がなく、復元できた点数以上に欠落した剥片も多い。貯蔵が、2次

加工を施して製品化するための素材貯蔵なのか、あるいは使用痕のある剝片などにみられるようにそのままの使用を目的にしているのかについては確実なことは言えない。

湯沢遺跡のほかにも県内の調査例にはいくつかの類例がある。高畠遺跡（鈴木ら、1980）・長者屋敷遺跡（高橋ら、1981）・名高根遺跡（三浦、1983）ではいずれも中期末葉の住居址にみられ、湯沢遺跡の場合と時期にも共通性があることが注目される。

第2表 「剝片貯蔵」一覧表

No	住居址名	地点	出土位置	剝片数	接合数	石 質	備考欄	図版
1	D II-3		南東壁際 小ピット	15	12	硬質泥質凝灰岩(1) 石質細粒凝灰岩(1) 硬質凝灰質泥岩(13)	U-fle (2) 折断石器(1)	240
2	D III-7	No 1	柱穴 埋土上部	23	16	珪質泥岩(23)	U-fle (1)	241
3	D III-7	No 2	壁際 小ピット	11	2	珪質極細粒凝灰岩(1) 流紋岩質岩石(8) 硬質凝灰質泥岩(1) 硬質泥岩(1)	U-fle (1) 石鎌(1)	
4	D III-8		柱穴 埋土上部	70	2	珪質泥岩(52) 硅質極細粒凝灰岩(18)	U-fle (8)	
5	E II-2	No 1	壁際 ピット	62	2	珪質凝灰質泥岩(5) 玉ずい(4) 玻璃質流紋岩(1) 黒耀石(1) 珪質極細粒凝灰岩(17) 硅質泥岩(27) 石質細粒凝灰岩(7)	U-fle (3)	
6	E II-2	No 2	床面直上	8			不 明	
7	E II-4	No 1	小ピット	27	18	珪質泥岩(11) 硅質極細粒凝灰岩(9) 珪質凝灰質泥岩(7)		242
8	E II-4	No 2	壁柱穴	19	12	鉄石英(9)		
9	E II-4	No 3	浅皿状ピット	21	16	硬質泥岩(21)	U-fle (6)	242
10	E II-8		北西壁寄り 床面上	43	4	珪質泥岩(13) 硅質凝灰質泥岩(17) 珪質極細粒凝灰岩(10) 緑色凝灰岩(1) 石英安山岩質角礫凝灰岩(1) 玻璃質流紋岩(1)	削器(2) U-fle(9) 鋸齒線石器(1) 削器状石器(2)	
11	E II-15		西南壁寄り 床面上	49	6	珪質泥岩(1) 硬質泥岩(1) 珪質凝灰質泥岩(47)	U-fle (5)	
12	E III-8		壁柱穴	72	56	硬質泥岩(72)	U-fle (5)	243 ↓ 245
13	F II-7		柱穴状ピット	16		硬質泥岩(16)	U-fle (2) 2次加工のある剝片(2)	
14	G II-2	No 1	北西壁寄り 小ピット	32		珪質凝灰質泥岩(32)	削器状石器(2) U-fle (9)	
15	G II-2	No 2	周 溝	17		珪質泥岩(1) 硅質凝灰質泥岩(1) 玻璃質流紋岩(1) 硅質極細粒凝灰岩(14)	U-fle (3)	
16	G II-2	No 3	周 溝	4	3	珪質泥岩(3) 硅質極細粒凝灰岩(1)	搔器破片(1) U-fle (3)	
17	G II-5		西壁際 小ピット	数個			不 明	
18	G II-10		床面上	9		珪質泥岩(3) 硬質泥岩(5) 硬質質凝灰岩(1)		
19	G II-19		北壁際 床面上	9		硬質凝灰質泥岩(2) 硅質泥岩(7)	U-fle (2) 削器(2)	
20	H II-3		南壁際 小ピット	20		硬質凝灰質泥岩(15) 硅質泥岩(5)		

U-fle : 使用痕のある剝片

なお、『遺構編』の本文中に記載した剥片数と第2表の数とが異なっている場合があるが、第2表の数が正しいものとして訂正する。

3. 堅果類 (図版90)

遺構から出土した堅果類を一覧表にした (第3表)。堅果類を出土した遺構の種類と数は、住居址が23棟、フラスコ形ピットが2基、不整形ピット1基である。

遺構の精査時に見付けることができた堅果類は可能な限り取り上げたが、採集を目的にして篩にかけることなどの方法はとっていない。したがって、第3表にあげ遺構数と乾燥重量は偶然性の強い限られた資料である。しかし、住居址にかぎれば、23棟は総数160棟の約14%を占めている。

堅果類は、オニグルミ・ドングリ・クリの3種類がある。ドングリとしたものは、本遺跡の地理的位置と時期から考え、コナラ・ミズナラの類である。出土件数は、オニグルミ19例・ドングリ9例・クリ6例である (No.12と13・21・22はそれぞれ1例として数えている)。乾燥重量の合計は、オニグルミ137.52g・ドングリ98.74g・クリ30.9gである (分離できなかったNo.16は除外)。形が良く残っている1個体あたりの乾燥重量は、オニグルミ2.4g・ドングリ0.74g・クリ0.52gであり、その値で乾燥重量の合計を割ると、オニグルミ約57個・ドングリ約133個・クリ約59個の個体数を仮定することができる。

なお、E II-30住居址からは乾し栗を模倣した土器が出土している (第126図1040)。

第3表 堅果類出土遺構

No	遺構名	出土層位・地点	種類	乾燥重量(g)	遺構名	出土層位・地点	種類	乾燥重量(g)	
1	C III-3住居址	床面	オニグルミ	1.7	18	G II-4住居址	床面	ドングリ	24.4
2	C III-11住居址	埋土	オニグルミ	1.5	19	G II-5住居址	柱穴	ドングリ	30.9
3	D II-5住居址	埋土	オニグルミ	47.3	20	G II-9住居址	床面	オニグルミ	2.25
4	D II-7住居址	埋土	オニグルミ	0.65	21	G II-10住居址	床面	オニグルミ	5.02
5	E II-6住居址	火	オニグルミ	0.15	22	G II-10住居址	焼土	オニグルミ	1.1
6	E II-16住居址	火埋設土器	オニグルミ	1.2	23	G II-10住居址	埋土	ドングリ	0.15
7	E II-17住居址	火	オニグルミ	0.7	24	G II-16住居址	埋土	クリ	0.85
8	E II-20住居址	埋土	オニグルミ	39.5	25	H II-5住居址	埋土	ドングリ	20.64
9	E II-20住居址	埋土	ドングリ	4.2	26	H II-5住居址	床面	オニグルミ	0.55
10	E II-20住居址	埋土	クリ	1.0	27	H II-7住居址	火	ドングリ	0.95
11	E IV-4住居址	柱穴	クリ	20.8	28	H II-8住居址	埋土	ドングリ	13.5
12	E IV-5住居址	火面	クリ	0.6	29	H II-8住居址	埋土	オニグルミ	10.45
13	E IV-5住居址	柱穴	クリ	7.65	30	H II-13住居址	柱穴	ドングリ	0.6
14	F II-6住居址	埋土	オニグルミ	15.9	31	C III-59フラスコピット	埋土	オニグルミ	1.0
15	F II-10住居址	柱穴	オニグルミ	0.9	32	G II-55フラスコピット	埋土上部	オニグルミ	1.55
16	F II-12住居址	床面	オニグルミ>クリ	1.3	33	I II-153不整形ピット	埋土	オニグルミ	6.1
17	F II-18住居址	埋土	ドングリ	3.4					